

王安憶『富萍』における一考察 ——蘇北から上海の“周縁”へ——

杉江 叔子

1. はじめに

王安憶（1954年～）は、現在の中国文学界を代表する上海在住の女流作家である。

本稿で扱う『富萍』は、雑誌『収獲』に2000年の第4期に掲載された、同じく上海を描いた『長恨歌』と並び称され、高い評価を得ている。その時代は、1964、65年の文革前であり、作品のタイトルにもなっている主人公・富萍が、蘇北の田舎から上海で保姆をしている奶奶²によばれて上海にやってきて、新しい生活環境の中での体験に感化され、上海市中心やその周縁地帯³を転々とし、生活の拠点を変えていく。しかし、最終的には、奶奶の孫養子・李天華との婚約を破棄し、自分自身で結婚相手を見つけ、その家族の一員となることに安らぎをおぼえ、上海の周縁地帯・梅家橋に落ち着く物語である。王安憶自身も、この作品では、上海の周辺の田舎から上海に移り住んできた人びとが、どのように上海に集まり住みつき、生活を営んでいるかを描きたかった⁴と述べている。『富萍』に関する日本語に訳された先行研究は、王曉明、劉小俊のものがあるが、あまり多くはない。王曉明は、王安憶は『富萍』において60年代の上海の人びとの日常を描き、底辺にいる人びとの日常生活に意識的に密着し、野蛮なつらい暮らしの中にある人情や情緒や活気を表現しようという努力が以前にも増して執拗に作品を貫いていると、この作品を高く評価している。劉小俊は、奶奶も富萍もともに、自分の家を渴望し探し求めることは共通しているが、二人の理想とする家への考え方の違いから生じる衝突を王安憶が描いたことに注目している。これに対して中国での『富萍』に関しての先行研究は、日本よりもはるかに多く、1995年に書かれた『長恨歌』との比較を通して論じられる⁷か、あるいは、富萍が上海での生活拠点を変えていく場所ごとに、富萍に関係する人びとに焦点を当て、彼らがどのようにして上海に移り住んできたのかを、

いくつかのケースに分類し論じる研究が多い。これらに対し、本稿では富萍と奶奶に焦点を絞り、富萍の上海での生活拠点の変遷をたどりながら、奶奶と富萍の家をめぐる考え方の違いを分析し、二人が最終的にどこに自分の根付く場所を求めたのかを「市中心——周縁」をキーワードとして考察する。なお、本稿で引用する『富萍』の邦訳は筆者による。原文は、湖南文芸出版社『富萍』2000年9月第1版を使用する。

2. 奶奶、そして李天華との断絶——蘇北から淮海路へ——

早くに両親を亡くした富萍は、叔父叔母のもとで暮らし、自分の将来について考えていたが、叔父叔母によって決められた李天華との結婚話を自分で拒否する権限もなく、仕方なく受け入れた。その後、富萍が奶奶を訪ねて上海に行くのであるが、それは、李天華からの結納品の中に、富萍が上海へ行くための旅費も含まれていたからであり、富萍はその機会を得て初めて江蘇省・長江以北の地、蘇北を出て、奶奶が暮らす上海・淮海路の弄堂にやってきた。奶奶が保姆として暮らす家で、自分も保姆として上海での生活を始める。16歳の時に上海に出てきた奶奶は、若くして夫を、そして、二人の息子も相次いで亡くし、たった一人の娘は嫁に行き、すでに30年、淮海路で保姆をしてきた。奶奶の人物像は、冒頭でまず次のように紹介される。

(奶奶の) 上海生活は、30年であったが、奶奶は一人の都会の女でもなく、一人の田舎の女のようにもなく、半分半分であった。この半分に半分が加わり、ある種の特殊な人間に変化した。(『富萍』 p.5)

奶奶の話すなまりもすでに変化しており、完全な田舎の言葉でもなければ、上海語でもなく、上海語のなまりが混じっていた。(『富萍』 p.4)

劉小俊は奶奶について、「30年間の都会での暮らしは彼女たちを故郷の生活から遠ざけたが、かといって都会の人間にもなりきれない、一種の「特殊な人間」に変えた」と述べている。奶奶の故郷である揚州の田舎には、昔から女性は上海で保姆として働く伝統があった¹⁰。奶奶のようにベテランの保姆になると、保姆の身分でも上海の戸籍¹¹を持ち、正式な居住民となる者も存在し、自分からどこの家庭の保姆になるか選び、保姆の仕事にも自信を持っていた。しかし、実際長い期間上海に住み着くと、その間に故郷に帰る家もなくなり、常に働け

なくなったら落ち着く場所がなくなるという不安を抱いている。たとえ生まれた環境で働き、上海の戸籍も持っていたとしても、保姆はしょせん保姆でしかない。事実、奶奶は将来に不安を抱いていたために、周りの強い反対を押し切っても、父方の兄弟の孫である李天華の初中学の学費負担までして、彼を孫養子として迎えた。さらに、親戚からのお金の打診があると断わらなかったのは、自分の恩を受けた人びとは、決して自分の恩を忘れることはないだろうと考えていたからであった。奶奶は、いずれ李天華と富萍を結婚させ、李天華を親から独立させ、彼に自分の老後の面倒をみてもらえば、田舎に残っている家も返さなくてすむ²し、その家を保姆ができなくなって故郷に帰った時の住処にしようと考えていた³。そんな奶奶の将来像について、富萍は次のように考えている。

ただ、将来はこの日からまだ遠く、これより以前にどんなことが起こるのかなんてわからない。これは富萍と他の女の子との違う点で、富萍はどんなことでも事態は変化するものであり、一定の決まりはないと信じていた。
 (『富萍』 p.30)

これは、幼くして父を、その3年後には母を亡くして一人ぼっちになり、舅舅⁴にはその貧しさ故に引き取られず、同じように貧しかった叔父に仕方なく引き取られ、家族の幸せなど味わったことがない富萍であるからこそ、心に抱いた感想である。保姆として自立して生活している奶奶が「将来は李天華に世話になり、面倒をみてもらうのだ」とはばかり話すのを、富萍は決して理解することができなかった。そして、李天華との結婚を受け入れることは、18歳の富萍にとって、孤独で辛かった自由のない生活の延長であることが予測できた。なぜなら、李天華の家庭は貧しく、養うべき父母と多くの弟妹、親戚がいたからであるが、富萍にとって親戚は、ただの煩わしい存在でしかなかった。

幼い時から家族でない人びとに囲まれて生活してきた富萍は、人に対して一貫して周到かつ慎重な態度であり、だから、彼女は人間を見極めることができた。彼女は一目で、李天華が従順な人間であることがわかった。現在、この従順な人が奶奶の描写ではっきり見えてきた。彼が養うべき父母、弟妹、大勢の親戚と多くの争いが、富萍の目の前にたちはだかる。富萍は親戚というものはどんなものか誰よりもよく知っている、親戚なんてただ煩わしいだけだ。だから、富萍には非常に煩わしい将来が見て取れたのである。(『富萍』 p.91)

李天華はまだ、18歳になっていないが、すでに父母や幼い弟妹たちを養っている。将来、もし経済的援助の申し出など、家族や親戚の間で厄介な問題が生じたら、李天華のおとなしくて従順な優しい性格からおそらく断ることなどできず、この性格が時には欠点となることもあるだろう。富萍は非常に多くの欲望があったわけではなく、ただ、特別に欲しいと思ったのは、自分の家庭であった¹⁵と述べている。李天華と富萍の結婚を自分の老後の住処の確保のためと考える奶奶と、結婚が人生の始まりであり、家庭が自分の身を寄せるだけの場所ではなく、自分を必要としてくれる家族がいる安らぎのある場所だと考える富萍との間には、家をめぐるときの大きな違いがあり、衝突するのは当然のことであった。

3. 舅舅を探しに——淮海路から閘北区¹⁶へ——

上海に来てから、なかなか蘇北に帰る気配もない富萍に奶奶は不安を感じ、もうすぐ正月という時期に李天華のいる田舎に帰省させ、結婚の準備を始めさせようとするが、富萍は蘇北に帰る気持ちなど全くなく、とうとう奶奶の家を飛び出した。この広い上海で、一人として身を寄せる人間も場所もないと、富萍は悲しみに打ちひしがれる。その時、ふと、12歳で蘇北から上海に出てきて、船でごみを運搬する仕事をしている孫達亮という舅舅がいることを思い出した。富萍は、舅舅と母の葬式で会ったのを最後に音信不通で、舅舅が閘北区に住んでいるという情報以外ほとんど何の手掛かりもなかった。しかし、結婚のために田舎に連れ戻されるのなら必ず舅舅を探し出そうと、何度か淮海路の奶奶のところから徒歩で、閘北区の中でも蘇北出身者が多く住む地域を人づてにたどり、やっとの思いで舅舅を探し出した。富萍は、親戚など煩わしいだけの存在だと考えていたが、唯一、血のつながりのある舅舅を探し出せば、奶奶から逃れるきっかけとなるかもしれないとわずかなチャンスに望みをたくした。

実際、テキストからは、舅舅の家が閘北区のどの辺りにあるのか正確なことはわからない。ただ、富萍は舅舅の家を見つけるまでには何度となく迷い、数日かかっている。この富萍の足取りは、富萍と上海との関係を象徴的に表すくぐりであるため、詳しく追ってみたい。

最初の二日間は、富萍は2、3駅分の距離を歩いてもとに戻り、あえて前に進まなかった。しばらくして、路線にだんだん詳しくなり、勇気もわいて、

だんだん遠くへ行くようになった。彼女は時々、ご飯を食べる時間すら忘れることもあり、ついには真っ暗になって、ようやく引き返す。この時、弄堂には誰一人としていない。富萍は、明日、また続けて駅へ行こうと思ひ、奮起するのであった。(『富萍』 p.103)

舅舅の家を見つけ出した時は、まず、親戚の人びとが話していた「閘北区」「上海東駅⁷」「陸橋」をキーワードにして、淮海路から蘇州河にかかる橋を渡り、上海東駅付近のそれらしき陸橋の上に立ち、その下に広がる一大棚戸⁸を眺めた。「この広い棚戸は、バラックの家々がぎっしり詰まっています、何の手がかりもない舅舅を探し出すことは、極めて困難なこと」であった。しかし、この時の富萍にとって、「この大きな棚戸地帯は、まるで一つの大きな網のようにも思え、ここで暮らす人びとはお互いのことを知っている」ように思えた。自力で舅舅を探し出そうと実行したことは、これまでの不幸な人生からの脱却にかける富萍の想いと、新しい将来に対する期待を意味する。舅舅の家を見つけ出した日は、正午には閘北区の陸橋に着き、それから約2時間人から人へ訪ね歩き、やっとの思いで目的地にたどりつくことができた。テキストには、富萍が進んだ方向など具体的に書かれてはいないが、いくつか手がかりがある。富萍が、舅舅と家の近所を散歩する場面では、舅舅が先に陸橋を降りて、狭い道を歩いていくと、道の前方は行き止まりで、踏み切りの赤い信号がチカチカ点滅していて、貨物列車がもうじき通ると富萍に話していることから、舅舅の家付近に線路がある⁹ことがわかる。他にも、奶奶が舅媽¹⁰に芝居に招待され、芝居が終わって奶奶が富萍を家に連れ帰る場面では、舅媽の家の近くのバス停から奶奶の住む家まで、最終のトロリーバスに約30分乗って帰る²場面もある。仮に、舅舅の家の場所を上海東駅からほど近い閘北区の線路沿いではないかと想定する。富萍が初めて舅舅の家を探し出した時、奶奶の住んでいた淮海路から舅舅の家のある閘北区まで、バスなどの交通機関はあったが、富萍はバスに乗らずに徒歩で探しだした。その距離は18歳の女性でも歩くことが可能な範囲である。地図から計算すると約3キロ、淮海路からもっとも遠い閘北区に舅舅の家を仮定しても約5キロ圏内であったと推定することができる。

上海語には上只角サンザコ、下只角ウツザコ²²という言葉があり、上只角とは居住条件の良い地域を意味し、下只角はその逆であり、文化程度が高い地域と低い地域という意味にも使われている。「市区」²³で見えてみると、黄浦、盧湾、静安、徐匯区などが上只角にあたり、閘北、普陀、南市区あたりが下只角と考えている人が多い。

黄浦、盧湾、静安、徐匯区は、以前の共同租界や仏租界と重なり、そこに住む人びとは間違いなく自分達の住む地区を他区と比較して上只角だと認識している。閘北、普陀区は蘇州河の北側にあり、租界時代に外地から蘇州河を下り鉄道を使い労働者が流入してきた地帯で、列強の資本家や中国の民間資本家がこの地域に工場を建設し、流入者を労働者として雇用したために、労働者が住み着いた棚戸地区がもともと多い場所であった。南市区も租界ができる以前から人びとが住んでいた旧縣城を中心とした一帯を指すのであるが、旧租界外は閘北、普陀区同様、棚戸地区が多かったために、上只角に住む人びとは閘北、普陀、南市区の下只角の人びとを見下す傾向にある。『富萍』にもこの意識が描かれている。

奶奶は、自分自身も蘇北出身であり、富萍の舅舅が住んでいた閘北や、普陀といった地区には、彼女と同じ故郷の人びとが集中して住んでいる²⁴のに、華やかな市中心に住んでいる住民と同じような偏見²⁵もあって、こうした周縁地帯を荒涼たる田舎であると見下し、彼らと行き来することもなく、「ただ淮海路だけが、“上海”と称される」²⁶と認識し、そしてそれは奶奶だけではなく、周縁地帯とはいえ同じ上海で暮らしている舅媽や、舅媽の近所の人びとでさえ、奶奶の暮らす淮海路こそが、「上海」であると確信していた。

舅媽は新しい青い布で作った上着をはおり、中に着ているチェックの柄の襟が襟元から出ていた。舅舅の新しい綿でできた靴を履き、この靴の上の部分は黒いコールテンで、周りには白で縁取りされ、風通しがよい、ひもでしばるタイプであった。肩には灰色の合皮でできたファスナーのついたバッグを持っていたが、これは小君²⁷から借りたものである。髪はくしでとかし耳にかけ、見たところは幹部のようであった。舅媽にとって奶奶に会うことは一大事で、非常に厳粛なことなのである。奶奶の住んでいる淮海路は、彼ら閘北に住んでいる人間にとっては、本物の上海なのである。(『富萍』 p.157)

富萍の事情を全く知らなかった舅媽は、富萍に結婚相手として、自分の甥である光明を紹介する承諾を得るために、奶奶のもとを突然訪れる。舅媽は夫の靴や小君のバッグを借り、できる限りのおしゃれをして「上海」に暮らす奶奶に初めて会いに出かけた。棚戸の間の横丁を通り抜け、出会った人に「どこに出かけるのか」と尋ねられると舅媽は「“上海”に行くのだ」と朗らかに答えた。舅媽にとって、淮海路に行くということは特別なことだった。舅媽の誠実な態

度に心を打たれ、舅媽の招待を受けて閘北にやってきた奶奶を、舅媽の近所の人びとも「上海」に住んでいる奶奶がやって来たと、わざわざ見に来るのであった。

かつて、奶奶は息子を亡くした直後、妻があったが子供に恵まれなかった修理工の戚師傅と男女の関係にあった。戚師傅は浦東出身で、大工になる勉強をし、徐家匯の浦西に出てきて、4歳年上の女性と結婚し淮海路の程近く「八仙橋」に住んでいた。奶奶は戚師傅の子供を妊娠した時点で、おそらく、彼が離婚し、「上海」で新しい家庭を築くことが出来ると期待した。しかし、戚師傅は奶奶が妊娠した子供を、自分と妻の子供とし、しばらくは遠縁の女性に育てさせると決意したと奶奶に告げ、それを聞いた奶奶はすぐに子供を墮胎した。その後も、奶奶は「淮海路」から出ることはなく、「淮海路」にある雇い主の家を探して働き続け、働くことができなくなるまで「上海」に暮らし、その後は、李天華とその妻となる予定の富萍に「故郷」に帰って老後を見てもらおうと考えていた。奶奶が、どんなに「上海」に対して緊密な愛着があったとしても、仕事ができなくなったら、「上海」から離れなければいけないと自覚し、「故郷」に帰る準備をしたのも、奶奶は保姆の立場から「上海」を深く経験していた²⁸からであり、「故郷」に固執し、「故郷」に帰る以外に方法はなかったのである。

一方、舅媽や棚戸地区の人びとも、奶奶の暮らす「淮海路」こそが「上海」なのであると考えていた。舅媽は、舅舅と同じ職業の船のゴミ運搬を生業とする家庭の出身で、舅舅に嫁いだ。このような船上労働者は一般に偏見の目で見られることが多く、同じような職業の人と結婚することが多かった。「上海にあって上海ではない」「閘北区」が、舅媽の生まれ育った「故郷」²⁹なのである。陳思和³⁰は、「棚戸地区の人びとが「上海市中心」を特別に「上海」であると称するのは、上海周縁に暮らす人びとの謙虚な意識であるが、こうした現代都市の排泄物の運搬を生業としている者たちも、無視され対立し排斥されていると感じることはなく、彼らは自分たちの民間の世界で実務に励み、楽しく賑やかに生きる活力を維持していた。」と指摘している。

奶奶は、ホームシックになると蘇州河を渡って、「閘北区」付近の四川北路、海寧路付近³¹へ向かう路を歩き、「故郷」の風景を思い出したが、「閘北区」や普陀区に多く住む同じ「故郷」の人びとと付き合うことはなかった。なぜなら、奶奶の「故郷」の人びとである蘇北人は江北人ともよばれ、本来は、長江の北、主に現在の江蘇省あたりの出身者を意味するのであるが、実際は、飢餓や生活

の必要に迫られて、貧しい農村から上海へ出てきた人を指し、それに加えて、彼らは棚戸で暮らし肉体労働に従事していたので、上海では蔑視され、粗野、無教養などのイメージで語られることが多かった³²からである。しかし、彼らのような非熟練・単純肉体労働に従事する人びとが、実のところ、大都市上海の生活の中心となって底辺で支え続けたのであり、近年の市場経済化の進展の原動力となった都市雑業層³³であった。滕朝軍³⁴は、「開港以来、上海は一貫して“外地人が集まった都市”なのである。こうした外地人——上海移民が、特殊なグループをつくり、彼らが上海の発展してゆく過程で重要な役割を果たし、誇張して言うのではないが、“百年に及ぶ上海の華やかな移り変わりは、確かに、1ページ1ページが移民の歴史”であり、上海移民が上海の迅速な発展を遂げた重要な原動力であった。」と述べ、王安憶も、舅舅のような下層民が暮らす周縁地帯こそが、実はこの都市の核心であると以下のように述べている。

この都市の地理上の周縁地帯は、実は都市の核心であり、多くの劇的な要因も、すべてここが発端となる。上海の中心地帯の華麗と繁栄、わずかな架空の物事の本質、人物、出来事もまた全てがうわべで、変化にとんだ話も作り話であり、冷たく傍観してしまうのも避けられない。だから、その周縁の広々とした天空の下で、苦しみの人生も経験したその土地の人びとの労働こそ、人生であり暮らしとなる。³⁵

彼らは非常に貧しい棚戸地帯に住んでいたもので、差別されることも多かった。そのため、蘇北人を始めとする農村からの移民が上海で職を得るには、地縁・血縁など様々な縁が必要であり、職を続けるにあたっては、帮といわれる非常に強いギルドの結束に守られる。例えば、蘇北人の多くが働く船上労働者の間では、蘇北の方言がこの業界の言葉であったように、都市雑業層として働く人びとは、実際の故郷よりも上海での結束は強く、互いに助け合いながら暮らしていた。舅舅のような移民たちは、「上海にあって上海でない」場所に自分たちの「故郷」を築いていたのである。

4. 母子との出会い——「閘北区」で見つけた「梅家橋」——

婚約を破棄し、奶奶の働く雇い主の家から飛び出してきた富萍に、「人に後ろ指をさされる、先祖までも罵られる行為だ」と舅媽は責めたが、富萍は、「私には生んでくれた母はいても、育ててくれた母はいないので、先祖なんて私とは

関係ない」と言った。富萍は、生まれ育った「故郷」を完全に捨てたのである。どこにも根付く場所がない、自分の家に居座る富萍を、舅舅は珍しく散歩に誘った。

池の近くを通りかかると、池に水草が覆っていた。舅舅は、「水ヒョウタンは、水草の一種だけど、これは富萍の名前と同じ、“浮萍”（杉江注：日本語では浮き草と訳す。）とも言ってね、音は同じだけど、字が違う。」と言い、木の棒切れを探し、地面に書いて、富萍に見せた。「この“浮萍”の“浮”が、“富萍”の“富”だ。」と富萍に教えた。（『富萍』p.223）

王安憶が作品のタイトルを主人公・富萍の名前としたことは、“富萍”と“浮萍”が同音であることから、まず読者は、富萍が「根っこがない浮き草」のように、自分の落ち着く場所がない人生を歩むのであろうと連想し、『富萍』というタイトルが、読者の読みを指示する指標⁶となっている。劉小俊⁷も、富萍という名前については、「水面に浮き、あてもなくさまよう漂う浮き草のように、富萍には根をはる地盤——家がない。」と論じ、陳思和⁸も、「人びとはよく“萍水相逢”（杉江注：赤の他人が偶然の機会に知り合うこと。）を用いる。そして、人生とは縁の偶然であり、往事を思い出させる出来事も、大上海にいる平々凡々なたくさんの人びとの中においては、一片の浮き草のようにとるにたらない。しかし、時には、浮き草が水面にとどまると、川床をさらに厚く覆う、深くて予測不可能な神秘である。」と指摘する。富萍は舅舅の家以外、どこにも身を寄せる場所がなく、作品のタイトルのイメージ通り浮き草のようにあちこちをさまよう。

エドワード・レルフ⁹は、ヴェイユの著書『根付くことの必要』から「根をおろすということは、おそらく最も重要であるけれども最もわずかしき認識されていない人間の魂の欲求である。」の一文を引用し、「根付くことに対する欲求は、秩序や自由、義務、平等、そして安全に対する欲求と少なくとも同等の価値をもつ。そしてある場所に根付くことは、おそらく他の精神的欲求のために必要な前提条件である。ある場所に根付くということは、そこから世界を見る安全地帯を確保し、また物事の秩序の中に自分自身の立場をしっかりと把握し、どこか特定の場所に深い精神的心理的な愛着をもつということである」と述べている。この主張に即して富萍の身の振り方を解釈すると、蘇北から上海の“周縁”「梅家橋」へと、苦しくとも富萍がたどった道のりは、根付くことができる

愛着のある場所探しのステップであった。

富萍は、以前、舅舅たちと一緒に見た芝居の会場で、たまたま隣同士になった障害のある青年とその母に、舅舅の家の裏の方向にある「梅家橋」で偶然出会う。「梅家橋」は、かつてゴミ捨て場があった場所であり、舅舅の住んでいる地域と比べると棚戸も狭く、さらに貧しい地域であった。彼らは、障害者年金をもらいながら、紙の箱をつくる内職をしており、その後、富萍はちよくちよく、この家庭に遊びに行き、内職の仕事も覚えて彼らを手伝った。この母子の過ごしてきた境遇は誰よりも過酷で貧しかったが、暮らしは非常に穏やかであり、富萍も彼らと一緒に過ごしていると安らぎを覚え、自分が生まれて初めてかけがえのない存在として受け入れられることに幸せを感じた。最終章では、富萍がこの母子と家族になり、妊娠していることがほのめかされ、富萍の新しい生活が「梅家橋」で始まる。

5. まとめ

「故郷」を捨てた富萍は、これまで、苦しかった蘇北の叔父の家、淮海路の奶奶の雇い主の家、やっと探し出した「閘北区」の舅舅の家と、どこにも根付くことができない浮き草であったが、夫となる青年と、その母に「梅家橋」で出会い、この場所に深い精神的心理的な愛着を感じ、自分が根付くことのできる新しい「故郷」となる場所を見つけることができた。そして、舅舅や舅媽のように「閘北区」に住んでいる、富萍や奶奶と同じ「故郷」の人びとは、「故郷」を離れ棚戸での暮らしがどんなに貧しくとも、実際の「故郷」よりも固い結束で結ばれ、この場所に愛着をもち、自分たちの「故郷」を築いていた。一方、奶奶は30年、「上海」の淮海路で保姆として暮らしてきたが、「閘北区」に住んでいる同じ「故郷」の人びとに対しては、上海人と同じように見下し、彼らと付き合いことはなかった。しかし、奶奶も「上海」に住んでいる昔からの上海人からみれば、「閘北区」に住んでいる「故郷」の蘇北人と同じように、偏見の目で見られていたのではないだろうか。

エドワード・レルフは、特定の場所に根付くためには、その場所に愛着を持つことが最前提であるという。奶奶は長年保姆として暮らした「上海」に愛着はあっても、生まれ育った「故郷」である蘇北に愛着はなかった。しかし、保姆を辞めた場合、どんなに「上海」に愛着があっても、学費援助までした孫養子と、その妻となる富萍に、自分の老後をたくし蘇北に帰る以外方法がなく、

蘇北出身者の中で奶奶だけが愛着のある場所に根付くことができなかつたのである。それに対し、富萍は蘇北を捨て、上海周縁地帯の中でも非常に貧しい梅家橋を新しい「故郷」とし、幸せな家庭を築いていくことが結末で暗示される。王安憶はこのような富萍の選択を通して、ある特定の場所に愛着をもち、そこに根付くことの重要性を描いたのではないだろうか。

注

- 1 保姆とは、日本語では家政婦、お手伝いさんと訳す。劉小俊 2004 年、2006 年では、保姆とは現代中国語で「育児や家事の手伝いを目的に家庭に雇われる女性」を指し、共働きが非常に多い中国の都市部では、人件費とくに農村からの出稼ぎの人件費が安いこともあって、一般の家庭でも保姆を雇うのは珍しいことではない。従来、保姆は雇い主の家に住み込み、その家族と生活をともにしながら、家事を担っていたが、1990 年以降は、従来の住み込みに加え、もともと都会に生活基盤がある保姆たちは、自宅から通う「鐘点工」、又は「小時工」（パートタイマー）の新しい形態で働く保姆が現れたと解説している。本論では以降、原文で示す。
- 2 奶奶とは日本語でおばあさん、父方の祖母、年取った婦人と訳すことが一般であるが、本稿では以降、原文で示す。
- 3 周縁とは、中国語で「辺縁」であるが、本稿では日本語訳の周縁と表記する。前田愛 1992 年では、「周縁」とは都市論において、都市の「中心」と相対して、そこから隔てられた地域を「周縁」とするという二つの空間の差異を表すコードとして用いられている。そして、前田は、アンリ・ルフェーヴルが説いた、都市空間から発信されるおびただしいメッセージを解読するコードとして、シンボルの次元、パラディグムの次元、サンタグムの次元によって構成される三次元図式の提案を引用している。具体的に示すと、シンボルの次元は一般に記念物にあり、その結果、その次元は過去と現在の諸イデオロギー・諸制度にかかわり、パラディグムの次元は対立の総体あるいは体系であり、サンタグムの次元は、連鎖（行程）であると解説している。『富萍』における「市中心—周縁」は、パラディグムの次元の具体的な指標としてアンリ・ルフェーヴルが挙げている「都会—田舎」「内—外」「中心街—周辺部」「周囲—門口」といった対立項の一つとすることができるのではないかと筆者は考察する。先行研究として、田広文 2005 年では、『長恨歌』は上海の中心を、『富萍』は上海の周縁を小説の背景とし、それぞれの主人公の人生を、その都市の「市中心」と「周縁」の両面の象徴としてとらえ、上海という都市を描いたと述べている。
- 4 王安憶『王安憶説』p.119。
- 5 王曉明 2003 年 pp.36-79。
- 6 劉小俊 2004 年 pp.251-273。
- 7 『長恨歌』との比較から論じられる、いずれの論文も『長恨歌』が「上海市中心」、

『富萍』は「上海周縁部」が作品の背景であることが前提である。陳思和 2003 年は、『富萍』が書かれた 2000 年前後は、都市の懐古ブームが全盛期であり、王安憶は旧き上海への幻想を抱くこともなく、上海の文化に対しての深刻な危機感と痛烈な風刺から、弄堂に暮らす主人公・王琦瑤が殺害されてしまった惨状に託して『長恨歌』を描いたと解説する。一方、『富萍』では都市文化の流行のあらゆる道具をすべて拒絶して、最も下層の社会にある上海周縁地帯、蘇州河上に漂う船上生活者や、棚戸地区で暮らす人びとに目を向け、主人公・富萍が閘北区の棚戸地区でもさらに貧しい梅家橋で、自分の幸せな家庭を築くことが暗示される作品であり、『長恨歌』とは結末が相反すると述べている。他には田広文 2005 年などがある。

- 8 先行研究の多くは、富萍が移り住んだ蘇北から淮海路、淮海路から閘北区、閘北区から梅家橋と三段階に分けて分析している。吉素芬 2004 年でも、この点をまず指摘し、富萍は故郷からは離れ都市へと近づくにつれて、自己の実現に近づくのであると解説している。『富萍』に登場する上海に移り住んできた人びとに関しては、奶奶を代表とする保姆と、舅舅を代表とする棚戸地域で生活する船上労働者に分類される。陳思和 2003 年では、この二つのグループに、上海の新しい“主人”として、奶奶の雇い主の解放軍出身の幹部夫婦も挙げているが、いずれも、老上海人にとって彼らは外地人でしかないと述べている。
- 9 注 6 に前掲 p.256。
- 10 保姆になる人は、若い時に夫と死別して、その後、再婚しなかった者や、夫に収入がなかったり、夫がふしだらであったり、息子がいない人が多かった（王安憶『富萍』 p.5）。
- 11 高橋孝助 古厩忠夫編『上海史』 p.7 に、1958 年に施行された「戸口登記条例」により、上海でも「戸口」制度（戸籍制度、戸籍と住民登録を一体化したもの）は大きな転換点となり、農民の都市への「盲目流入」を厳しく制限し、過剰人口を含めた農村居住者には「農村戸口」を与えられるようになった。一方、「都市戸口」を認めた者には、国家が就職・食品配給・住宅供給・医療や年金など各種の社会保障・教育などの保証を与えたが、「農村戸口」の者には、各人民公社が保証は自弁することになったと述べられている。奶奶が戸籍をいつ取得したかはテキストからは不明であるが、1958 年を境に上海で戸籍を取得するのは困難になっており、奶奶は 1930 年代半ばから上海で保姆をしているので、戸籍を取得できたが、富萍が上海にやってきたのは、1964 年以降であるので、戸籍を取得するのは困難であることが伺える。事実、『富萍』 p.102 に、富萍の母が亡くなって、舅舅は上海では富萍の戸籍の取得が難しいことを理由にあげ、結局、富萍は叔父の家に引き取られた記述がある。
- 12 一人娘が嫁いだ後、本来跡継ぎのない奶奶は家を父の兄弟に返さなければいけなかったが、李天華を養子としたことで、家は相変わらず父の兄弟の名義ではあったが、奶奶が暮らす権利は残されたとある（王安憶『富萍』 p.11）。
- 13 注 6 に前掲 p.261。「孫」と養子縁組をしたのは、家が欲しいという切実な思いから生み出した奶奶の知恵なのである、そして、この養子縁組によって、彼女は老

後「名義上正しく」住む家を確保することができたのであると分析している。

- 14 母の兄弟、母方のおじを意味する。『富萍』では舅舅は母の弟を指す。以降、本論では原文で示す。舅媽はその妻。
- 15 注4に前掲 p.111。
- 16 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%96%98%E5%8C%97%E5%8C%BA>
上海市中心部を形成する上海市九中心区の北部で蘇州河に隣接し、南東に黄浦区、南に静安区、河を挟んで隣接して北に宝山区、東に虹口区、並びに西には普陀区が隣接している。面積は 29.2 キロ平方メートルで人口は 810211 人（2003 年）である。（2007 年 9 月 23 日閲覧）
- 17 木之内誠『上海歴史ガイドマップ』 p.125 に、当時の上海東駅の場所は現在の上海駅となっている。
- 18 根橋正一『上海——開放性と公共性』 pp.139-142 に、棚戸とは、廢船の木材等を支柱とし、それを草やぼろ布で覆っただけで、住宅の名に値しないものであり、上海の下層民である埠頭苦力、各種の車夫、女工、幼年工等の多くが住んでいたとある。棚戸の建ち並ぶスラム街を棚戸地区といい、上海の経済発展とともに形成された。
- 19 注10に前掲 p.223。注11に前掲 p.77 にも、棚戸地域が出現した地域は、租界に近接した周囲で、埠頭や工場が多い場所や貨物駅があるので、舅舅の住んでいた棚戸地域の近くに、貨物列車が通る線路があった可能性はある。
- 20 舅媽とは舅舅の妻。ここでは、富萍の母の弟の妻である。以降、本論では原文で示す。
- 21 注10に前掲 p.163。
- 22 渡辺浩平『上海路上探検』 p.154。
- 23 上海市の市域は、中心部の市街地とその周辺の「市区」と「郊県」からなる。大阪市立大学経済研究所編『世界の大都市 2 上海』 p.3 に、『富萍』の舞台である 1964 年当時、上海は工業体系の変更のため、呉淞、閔行両区が廢止され、それぞれ楊浦、徐匯区に編入されていた。これにより、上海市は黄浦、静安、盧湾、徐匯、南市、虹口、閔北、楊浦、長寧、普陀の 10 市区と上海、嘉定、宝山、川沙、奉賢、南匯、松江、金山、青浦、崇明の 10 郊県であった。2007 年 9 月現在は 18 市区と 1 郊県。
- 24 注10に前掲 p.6。
- 25 菊池敏夫・日本上海史研究会編『上海職業さまざま』 pp.157, 160。後述するが、蘇北出身の人びとは、非熟練・単純肉体労働に従事することが多く、閔北区の棚戸、バラックに住み、上海では粗野、無教養などのイメージで語られ、下層民の代名詞とされ犯罪者扱いされることもしばしばあり、蔑視される対象であった。
- 26 注10に前掲 p.6。
- 27 小君とは、舅舅の家の隣に住む小学校を卒業したばかりの活発な性格の女の子で、よく舅舅の家に遊びに来て舅媽の手伝いをし、富萍とも親しかった。
- 28 エドワード・レルフ『場所の現象学』 pp.128-130 では、場所の本質とは、「外側」とは異なる「内側」の経験にあるという。仮に興味の焦点が自分の家ならば、家

の外にあるものはすべてが「外側」になり、もし、自分の関心が自分の所属する地域にあるなら、その地域の外にあるものはすべてが「外側」になるというように、「内側」と「外側」の境界は、自分の意図によって変化する。そして、場所に対して「内側」になることはそれに属することであり、深く「内側」になればなるほど場所に対するアイデンティティは強まると論じている。つまり、奶奶にとっての「上海」は淮海路付近であり、それ以外の上海は「上海にあつて上海でない」場所なのである。奶奶は「上海」にこだわり保姆として働き続け、「上海」に対する愛着は非常に強かったが、保姆ができなくなったら「上海」に住み続けることが難しいことは、その長年の経験からも理解していたと考察する。

- 29 張小紅 2004年 p.42 に、故郷には都市経験以外の土地アイデンティティ以外に、都市経験内の「ここに生まれ、ここに育った」故郷もあると解説している。
- 30 陳思和 2003年 p.403。
- 31 海寧路は閘北区と虹口区を東西に横断しており、四川北路は閘北区に近い虹口路を南北に横断し、海寧路に交差する。
- 32 注 25 に前掲 pp.157, 160。
- 33 注 25 に前掲 p.157。都市雑業層とは、「三百六十行」と言われ、大都市上海の生活を裏で支える、ありとあらゆる職業を総称した言い方で、この中でも中心となるのが、非熟練・単純肉体労働に従事する人びとであると述べている。
- 34 滕朝軍「王安憶小説的移民書写」2004年6月。
- 35 王安憶『尋探上海』p.123。
- 36 前田愛 1993年 p.96 に、前田は文学テクストを読み解いていくコードに関して、文学テクストにつけられているタイトルが、読者の読みのベクトルを指示する記号として信じられていると指摘している。
- 37 注 6 に前掲 p.262。
- 38 注 30 に前掲 p.401。
- 39 注 28 に前掲 pp.101-103。

参考文献

- 大阪市立大学経済研究所編『世界の大都市2 上海』東京大学出版会 1986年2月
- 前田愛『都市空間のなかの文学』ちくま学芸文庫 1992年8月
- 前田愛『増補 文学テクスト入門』ちくま学芸文庫 1993年9月
- イーファー・トゥアン『空間の経験 身体から都市へ』ちくま学芸文庫 1993年11月
- 高橋孝助 古厩忠夫編『上海史』東方書店 1995年5月
- 木之内誠『上海歴史ガイドマップ』大修館書店 1996年6月
- 渡辺浩平『上海路上探検』講談社現代新書 1997年1月
- 根橋正一『上海——開放性と公共性』流通経済大学出版会 1999年2月
- レルフ・エドワード『場所の現象学』ちくま学芸文庫 1999年3月
- 王安憶『富萍』湖南文芸出版社 2000年9月
- 王安憶『尋探上海』学林出版社 2001年11月

- 菊池敏夫・日本上海史研究会編『上海職業さまざま』勉誠出版 2002年8月
上海市測繪院編制『2003年版上海城市交通図』上海科学技術出版社 2003年4月
王安憶『王安憶説』湖南文芸出版社 2003年9月
陳思和「懐旧伝奇与左翼叙事：『長恨歌』『中国現当代文学名篇十五講』北京大学出版社 2003年12月
王曉明「上海はイデオロギーの夢を見るか？——王安憶の小説創作の変化から——」
『接続 vol3』接続刊行会 pp.36-79 2003年
劉小俊「保姆たちの家への渴望——王安憶『富萍』と『鳩雀一戦』について」『ジェンダーからみた中国の家と女』関西中国女性史研究会編 東方書店 pp.251-273
2004年2月
吉素芬「『富萍』：人生的另一種審美形式」**商丘師範学院学報** 2004年2月
滕朝軍「王安憶小説的移民書写」**哈尔滨学院学報** 2004年6月
張小紅「都市とは華やかな衣装なり」『野草』74 中国文学研究会 pp.30-57
2004年8月
田広文「試析王安憶的“双子星座”小説」『**綏化学院学報** 第25卷 第1期』
2005年2月
関西中国女性史研究会編『中国女性学入門』人文書院 2005年3月
劉小俊「都会の周縁に生きる女性たち——文学作品にみる保姆のありかた——」
『中国21』vol.25 愛知大学現代中国学会編 2006年9月